とまどいのシグナル

真船るのあ

角川ルビー文庫

KADOKAWA RUBY BUNKO

とまどいのシグナル

真船(まふね)るのあ

角川ルビー文庫 R45-2　　10941

平成11年2月1日　初版発行

発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集部(03)3238-8555
営業部(03)3238-8521
〒102-8177　振替00130-9-195208
印刷所――暁印刷　製本所――本間製本
装幀者――鈴木洋介

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部サービスセンターにお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-04-437002-8　C0193　定価はカバーに明記してあります。

©Runoa MAFUNE 1999　Printed in Japan

とまどいのシグナル

真船るのあ

10941

角川ルビー文庫

目次

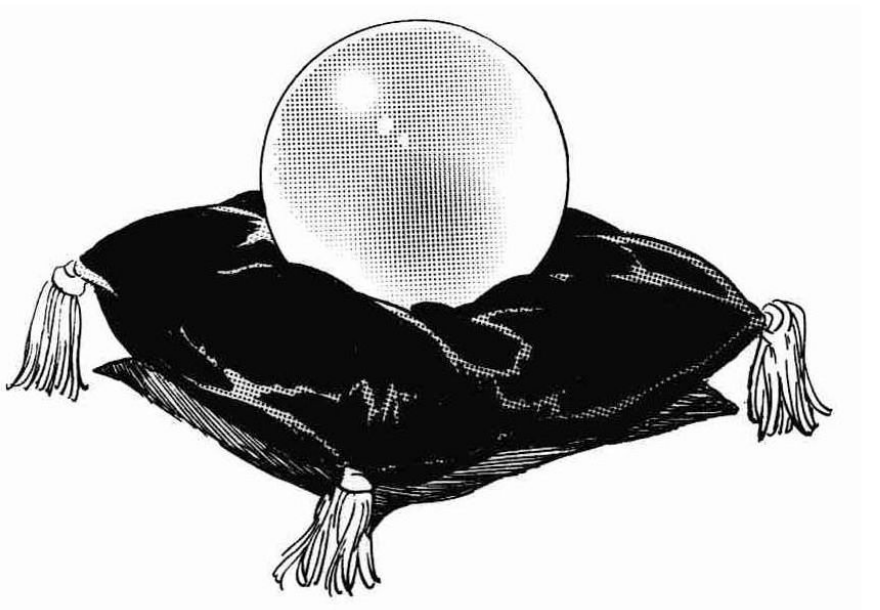
とまどいのシグナル …… 5

あとがき …… 233

口絵・本文イラスト　氷栗 優

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とまどいのシグナル



「うららかな春の木漏れ日の下を、一人の若者が歩いていく。
流行の発信地と言われる、東京は代官山の駅から歩いて約十五分。
にぎやかな繁華街から少し離れただけで、そこは緑も多い閑静な住宅街だ。
青年は背筋をまっすぐ伸ばし、歩道をわきめもふらずに先を急いでいる。
年の頃は、まだ二十になるかならないか。
これといって特徴のない綿シャツにジーンズ姿の彼は、決して背は低い方ではないが、かなり細身の身体つきのせいで驚くほど華奢に見える。
色を抜いているわけではないらしい色素の薄い髪は少し長めで、せっかくの軽さを殺したこれといって特徴のない地味な髪形に整えられており、くわえて銀縁の眼鏡がせっかく整った顔立ちの青年をさらに目立たない雰囲気にさせていた。
青年は住宅街の公園脇の道路を通り、ややあってレンガ造りの建物を模したある高級マンションへと吸い込まれていった。
いくつかのテナントが入っているその複合ビルには、『占星術コンサルタント・禊館』という、やや仰々しい看板がまっとうな会社名に混じってさりげなく掲げられている。
青年はエレベーターに乗り込み、めざす五階で降りるとその禊館のプレートのついた部屋の

ドアを開けた。
すると受付の女子社員が、読みふけっていた週刊誌を放り出し、いち早く立ち上がって礼をする。
「あ、おはようございます、紅先生」
週刊「ニュース現代」というその雑誌の表紙に、『百発百中！　代官山に登場した謎の美形占い師』という派手な見出しが踊っているのを、彼は幾分苦々しげにちらりと一睨した。
「おはようございます」
青年はやや機械的に会釈をすると、そのままロッカールームへと向かう。
『紅薔薇』とプレートがついたロッカーを開け、青年は少し考えてから黒のスタンドカラーのシャツと、あらかじめ置いてあるジュエリーボックスを取り出した。
スタンドカラーに着がえを済ませ、その胸元に大仰な銀細工のアクセサリーをじゃらじゃらとつけたそのいでたちは、どう贔屓目にみても普段着にはみえないが、すらりと均整のとれた青年がまとうとその色の白さと美貌にあいまって妙に似合ってしまう。
あいかわらず無表情のまま衣装換えを済ませると、青年は今度は洗面台に向かって化粧道具を広げはじめた。
地味だった髪は綺麗にセットされ、くわえてカラースプレーで銀のメッシュに染められる。
伊達眼鏡を外し、ファンデーションを塗ってアイラインと仰々しい目張りを入れた彼の姿は、

この建物へ入ってきた時とは、まさに別人のごとくきらびやかに変身していた。
そのまま劇場の舞台にあがれそうなほど端正な美貌を、面白くもなさそうに鏡の中で一通り確認し、青年は道具を片付けはじめた。
と、その時、扉がノックされ、受付の女性が顔をのぞかせる。
「紅先生、水原社長がお呼びです」
「……今日は社長、お越しになっているんですか？」
「ええ、ついさきほど」
「わかりました、今行きます」
ちょうど支度も終わったところなので、青年は立ち上がってロッカールームを後にした。
そのまま、一番奥に位置する社長室のドアをノックする。
「はい、どうぞ」
中からのさわやかな応答に、青年は扉を開けて室内へと足を踏み入れた。
「やあ、調子はどうだい？　慧くん」
「おかげさまで。それよりお呼びでしょうか？　水原社長」
礼儀正しく挨拶する青年に、社長と呼ばれた青年は困ったように微笑する。
「やれやれ……血のつながった従兄弟だっていうのにあいかわらず他人行儀だね、きみも。もっと年相応にしたらどうだい？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

慧、と呼ばれた青年は、かすかに表情をゆるめる。
「……若いとお客になめられると私に叩き込んだのは、社長ですよ？」
「ああ、そうか、そうだった」
「ちなみに、仕事中は親戚も従兄弟もない、お互い対等な経営者と占い師なんだから、ビシビシしごくぞとおっしゃったのも社長です」
「本当？　僕そんなスパルタ発言したことあったかな？」
水原はそう空とぼけてみせるとくったくなく笑って、デスクの上で長い指を組んだ。
「どんな予言もぴたりと当たる凄腕占い師紅薔薇が、実は十九歳だなんて、占って当てられた本人じゃなきゃ、なかなか信じられないだろうからね」
かく言う水原自身も、二十七という実際の年よりも若くみられがちで、当初は苦労した経験をしている。
一見、温厚で上品な好青年である彼が、年商一億を稼ぎ出すこの禊館を経営する若社長だとは、おそらく誰も思わないにちがいない。
大学時代から占星術に傾倒し、彼自身が占った人間はすでに数千を下らず。
ついにはほとんど資本金すらおぼつかなかったこの占いの館を、たった五年でここまでにした、経営者としては凄腕の人物なのである。
「社長、本題から話が逸れていますよ」

と、水原の隣から控え目に声をかけてきたのが、彼の右腕として縁の下の力持ちに徹している五十嵐正隆。

落ち着いた風貌と、きっちりと一分の隙もない身のこなしで背広を着こなした彼は、デスクの水原から見ると多少年上に見えるが、実は二人は同い年である。

水原とは大学時代からの親友で、彼が起こしたホロスコープをコンピューターでデータ化し、現在禊館が受け持っているコンピューター占いのプログラミングはすべて彼の手によるものだ。ほとんど二人で興こした事業、といっても過言ではないところを、自分は社長の補佐をしているだけだから、とかたくなに秘書という立場を崩そうとしない控え目な男である。

現在、禊館では会員制で企業の経営者向けのホロスコープ新聞なども発行している。

そのメンバーの中には、名を挙げれば大概の人が知っている著名な経営者の名もあり、禊館の的中率の高さを物語っている。

「はいはい、わかってますよ。まず一つめはこないだの週刊ニュース現代の件なんだけど」

水原の言葉に、慧は鋭敏に反応する。

「慧くんの顧客から入手したあやふやな情報だけで、無断であんな記事を掲載したあの出版社には、うちから抗議文を送っておいたから。ほんとに……いつかはやられるかもって思ってはいたけど、こんなに早いとはね……」

禊館では顧客が顧客なだけに、取材は一切シャットアウト。

しかし著名人のスキャンダルを狙うマスコミ陣の追求は激しく、今回みごとに期待のニューフェイスとして槍玉にあげられてしまったのが慧だったというわけだ。

「しかし、面が割れなかったのが不幸中の幸いだったな。これからも写真には気をつけないと」

「ええ、そうですね」

五十嵐の言葉に、慧は神妙な面持ちでうなずいたが、さして気にしている風でもない。

とことん感情を表さない彼に、水原は困ったように話題を変えようとした。

「ああ、それと、実は今日の予約が入っていた緑風堂の店長が、急に用事でこられなくなったと連絡が入ってね。それで代わりにどうしても慧くんにみてほしいという人がいるんだけど、どうかなと思って」

と、彼は社長らしからぬ低姿勢な口ぶりで慧の返答を待つ。

緑風堂とは、最近慧が依頼を受けて改装を手がけた喫茶店である。

経営不振だった頃に藁にもすがる思いで慧の元を訪れた緑風堂の店長である橋本氏は、そのアドバイス通りにカフェレストランへ転向。新規オープンの時期を決めて店舗の内装まで改装し、みごとに立て直しに成功した。

以来、経営方針まで必ず慧におうかがいをたてるマスターは、立派な慧の信者なのだ。

「……身元は確かなお客ですか？」

「一応、緑風堂の橋本さんからの紹介は受けてるけど。なんでもイベント会社を設立した若社長さんだって」
「わかりました。私の方はかまいませんから」
「大丈夫かい？」
「ええ、いつもの衝立を使います」
穏やかな笑みを浮かべ、慧は応じる。
時折、自分より年下のような気がしてしまうほど気取りのない社長に、慧は絶大な信頼をよせており、彼に報いるためには多少の無理はいつでもする覚悟だった。
「それでは最初の方がそろそろみえる時間ですので、失礼します」
「うん、がんばってね」
律義に一礼して社長室を退室した青年を見送って、水原はためいきをつく。
「……ほんとはあの子にも、年相応の顔をさせてやりたいんだけどね……」
「……水原……」
すべての事情を知る五十嵐は、困ったように眉をひそめていた。

「ああっ、紅先生！　先生との面談の日を一日千秋の思いで待ちわびていましたよ！」

すっかり常連になってしまった大手証券会社の専務は、部屋に入ってくるなりまさに慧の手を取らんばかりの勢いだ。

「その様子では、この間お教えした通りに売買していただけたようですね」

と慧は余裕の笑みを浮かべて応じる。

「ええ、ええ、もちろんですとも！　もはや我が社は先生のご助言にはすべて従います！」

口髭を生やし、やや小太りのその中年男は、唾を飛ばして力説し、机を挟んで対面した慧にずいっと肉迫する。

接客用の笑顔を不快感で崩さぬよう注意しながら、慧は話の先を促す。

「で、今日お聞きになりたいことは？」

「あ、はい、社長が前々から処分したがっているM製薬の株のことなんですが」

と男は慌てて持参したアタッシュケースを開き、中からハンカチにくるんだ腕時計とインスタントカメラで撮影した写真を取り出した。

「こちらが今朝まで社長が身につけていたブルガリの時計で、こちらが同じく今朝撮影した社長の両手の平の写真です」

「拝見いたします」

まず腕時計を左の手の平にのせた慧は、一つ深呼吸をして目を閉じた。

これが占いに入る前の精神統一の儀式だと知っている中年男は、おとなしくそれが終わるの

を待っている。
ややあって目を開いた慧は、それからおもむろに写真を手にとった。
鑑定依頼主の社長は、分刻みのスケジュールをこなす超多忙の事業家で直参できないらしく、いつもこうしてこの男を使者としてよこしていた。
本人が直接こられない場合は、こうして本人が身につけていたものと手の平の写真を持ってきてもらうのが条件なのである。
しばらくの間、無言で写真の手相を眺めていた慧が、ようやく口を開く。
「手放されるのは、もう少し様子をみた方がいいでしょう。今は底値ですが、三か月後に、M製薬の株は飛躍的に伸びます。今手放すと約八千万ほどの損害になります」
「そ、そうですか」
「ああ、それから……」
と慧はこめかみに右手を添えた。
「社長に車に乗られる時には、必ずシートベルトをおつけになるように、とお伝えください」
「……は？」
「むろん運転手が運転をされるでしょうが、助手席でも後部座席でも、です。運転手の方には安全運転を心がけるようにと、注意された方がよろしいでしょう」
「そ、それは社長が交通事故にあうかもしれないということですか!?」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com